

## 入選

## テーマ…医療と福祉、わたしの体験 「救う言葉、救われる言葉」

東京都・東洋高等学校2年 太田 麻里菜

「どんな病気なのか教えてくれる？」

部活の先輩にかけてもらったこの言葉が私を変えてくれた言葉だ。

私はステイックラー症候群という病気を持って生まれた。そのため脚に障害があり、杖をつけて歩いている。中学生のころ、3年間の入院生活で外の世界とは疎遠になっていた。小学生のころには外出すれば足をジロジロ見られ、歩き方を馬鹿にされたこともあり、外の世界で向けられる目を気にしていた。

高校で英語部に入り、部活を楽しみにしていた。少しの間、部活が楽しいと思えていた。文化祭の準備が始まったころだ。活動内容が増え、できないことが増えていった。例えば劇の背景の色塗り。床に座ったの作業だ。だが、私はしゃがんだり立ち上がったりすることに大きな負担がかかるのでできなかった。他にもうまくいかないこともあり、次第に心に壁を作った。部活に行ったらできることがないし、つらいだけだからと行きたくなくなった。また、病気をどう思われて、どう見られているか、そればかり気にしていた。何をすることも病気であるという現実がつきまとい、苦しかった。皆に身体のことを知ってもらいたいと感じ、病気のことを伝えたい方がいいたった。

文化祭が終わり、先輩とのLINEの中で、「ちゃんと理解したい」と送られてきた。この先輩になら話してみようと思ひ、身体の状態や私が思っていることを送ってみた。次の部活から先輩が「大丈夫？」と声をかけてくれた。ひと言だけでもうれしかった。雨でうまく歩けなくて転んでしまった日があった。雨が降ってしまっただけで転んでしまう自分を嫌に思った。そんなとき、先輩が助けてくれた。傘をさしてくれて、話してよかったと思った。しばらくして、部長が部活で

の様子を心配して声をかけてくれた。「病気のことを隠しているわけではない」と伝えたら、「どんな病気か教えてくれる？」と聞かれた。伝えたら気持ちが悪くなり、早く話していればこんなに悩むことはなかったのではないかと思った。「今できることは将来できなくなっているかもしれない。だから今できることはちゃんとやりたいし、病気のせいにして逃げたくない」。それが伝えられたこと。「教えてくれてありがとう」と言われた。先輩全員にも話すことになった。一生涯命メモを取りながら聞いてくれた先輩もいた。「教えてくれてありがとう。よかったよ」と言ってもらえた。

この部活のメンバーで参加できる最後の行事が体育祭だった。部活対抗リレーがあり、毎年英語部は参加している。最初に話した先輩に、「リレー、出してみたいな」と言ったら、「車椅子を押してあげたい」と言ってくれた。うれしかった。不安はあったものの、車椅子で参加することになった。皆と同じ場所で見えた景色は一生忘れない。ゴールテープを初めて切った瞬間、「ありがとう」と心の底から思った。話さなかったら、ここまで部活を続けてこられなかったし、リレーになんて出られなかった。

周りの目はばかり気にして、「病気のせいにして逃げたくない」と思っていた私が、実はいちばん病気のせいにして心に壁を作っていた。どうして早く話そうと思わなかったのだろうか。「どんな病気か教えてくれる？」。そのひと言で気づけた。伝えなければ伝わらないし、受け止めてくれる人の存在がこんなにも大きいことを。「大丈夫？」のひと言がこんなにも温かい言葉だということ。「私なんて何にも力になれない」と思う人がいる。そんなことはない。話を聞いてくれるだけ、声をかけてもらえるだけで救われる人はたくさんいる。だから私は、誰かの言葉に真剣に耳を傾け、困っている誰かに「大丈夫？」と声をかけられる人になりたい。そしてそれが、「共に生きる社会」を作っていく言葉なのだろうと思う。